

〔資料〕

新型コロナウイルス感染症拡大下における本学卒業生の状況

—令和元年度卒業生へのアンケート調査結果より—

中北 裕子¹⁾ 灘波 浩子¹⁾ 日比野 直子¹⁾ 川島 珠実¹⁾ 長谷川 智之¹⁾
竹村 和誠¹⁾ 荻野 妃那¹⁾ 山本 翔太¹⁾ 岡根 利津¹⁾ 西川 真野¹⁾
小林 奈津美¹⁾ 辻 まどか¹⁾ 林 辰弥¹⁾

【要 旨】

新型コロナウイルス感染症の拡大により、これまでとは異なる状況下での卒業および就業・就学となった令和元年度卒業生を対象にアンケート調査を実施した。調査の目的は、新型コロナウイルスの感染拡大下で卒業生が置かれた状況や医療従事者としての経験と学びを明らかにすることであった。結果より、卒業生は、卒業式の中止を仕方がないと受け止め、卒業旅行に行った後は入職日まで感染予防に留意した生活を送っていた。また、就職（就学）後は、職場（学校）の教育・勤務状況が様々に変化する中で、日常生活に支障を感じ、悩みを抱えていた。その一方で、医療従事者の一員として、感染予防の重要性や医療職者としての責任等、様々な学びを得ていること、また、日常の有難さや人とのつながりの大切さなどの生活者としての経験も得ていることが明らかになった。

【キーワード】 新型コロナウイルス感染症 感染予防 看護大学 新人教育 勤務体制

I. はじめに

令和という新しい元号に日本中が喜びに包まれ、日本人のすべてが未来への希望に満ち溢れたのもつかの間、その年度末に突如襲った新型コロナウイルス感染症の爆発的な拡大は、日本人だけではなく世界中の人々の生活様式の変化を余儀なくした。それは日本の社会全体にもその変化を強いることになり、大学もその例外ではなく、大学を含むほとんどの教育機関で卒業式が中止され、卒業後の看護師や保健師等の入職の仕方も例年とは大きく変化した。看護師あるいは保健師、助産師として入職したり、進学した卒業生は、その変化に対して様々な不安を抱き、困難に遭遇し、職場（学校）での役割を果たしつつ、日常を過ごしてきたと推測された。本報告は、三重県立看護大学の令和元年度卒業生に実施したアンケート調査の回答をまとめることで、新型コロナウイルスの感染拡大下で卒業生がどのような状況に置かれて、医療従事者として何

を経験し、何を学んだのかについて、卒業生、大学教職員で共有することを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

三重県立看護大学看護学部を令和2年3月に卒業した104名

2. データ収集方法

1) 調査時期

令和2年7月11日～7月31日

2) 調査方法

Microsoft Formsを用いたアンケート調査

3) 調査内容

(1) 基本属性：職業、勤務（就学）地など

1) Yuko NAKAKITA, Hiroko NAMBA, Naoko HIBINO, Tamami KAWASIMA, Tomoyuki HASEGAWA, Kazunari TAKEMURA, Hina OGINO, Shota YAMAMOTO, Ritsu OKANE, Mano NISHIKAWA, Natsumi KOBAYASHI, Madoka TSUJI, Tatsuya HAYASHI : 三重県立看護大学

- (2) 卒業旅行・卒業式について：卒業旅行先、旅行後に留意したこと、卒業式が中止になったことへの思いなど
- (3) 勤務（就学）先の状況について：勤務（就学）開始時期、職場（学校）の教育・勤務体制など
- (4) 生活上の支障や悩みについて：現在の生活の支障や悩み、相談相手など
- (5) 本学からのサポートについて
- (6) 医療従事者として得た学び

3. 分析方法

量データは単純集計を行い、質データ（自由記載部分）は、KJ法にて分類した。

4. 倫理的配慮

対象者には、在学中に学内メールサービスで使用していたメーリングリストを用いて、アンケート調査への参加を依頼した。依頼のメールには、調査目的・方法、アンケート内容、参加の自由意思の尊重、秘密厳守、匿名性の保持、結果の公表について明記した文書を添付し、回答の送信をもって同意が得られたものとするを記載した。

Ⅲ. 結果

回答者は74名で、回収率は71%であった。

1. 回答者の基本属性（図1）

現在の職業は、看護師が52名（76%）、保健師が8名（12%）、助産師が6名（9%）、学生が2名（3%）であった。

現在の勤務（就学）地は、三重県が49名（67%）、愛知県が14名（19%）、その他が10名（14%）であった。

現在の住居は、自宅が33名（45%）、アパートで一人暮らしが24名（32%）、職場の寮が16名（22%）、その他が1名（1%）であった。

出身地は、三重県が53名（72%）、愛知県15名（20%）、その他6名（8%）であった。

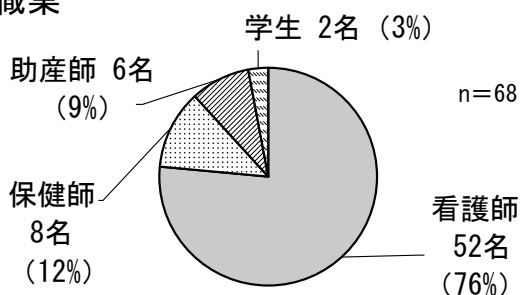
2. 卒業旅行・卒業式について

1) 卒業旅行（図2）

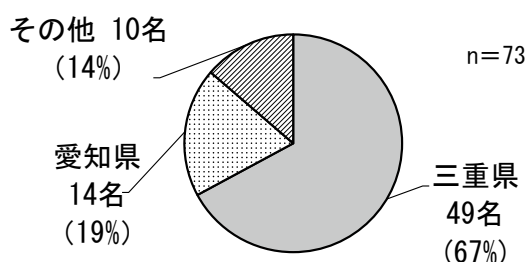
卒業旅行に行った者は60名（81%）、行かなかった者は14名（19%）であった。

卒業旅行の行き先は、国内が30名（50%）、国外が22名（37%）、国内および国外の両方が8名（13%）であり、国外旅行を国内旅行に変更した者は6名であった。

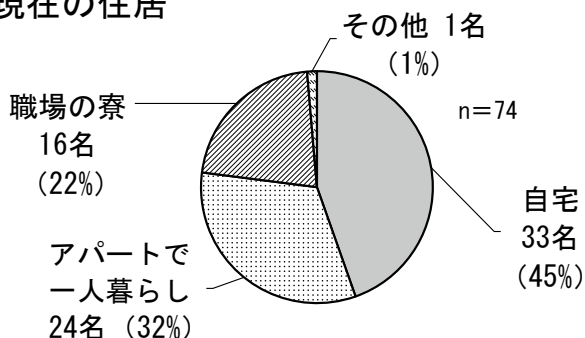
職業



勤務（就学）地



現在の住居



出身地

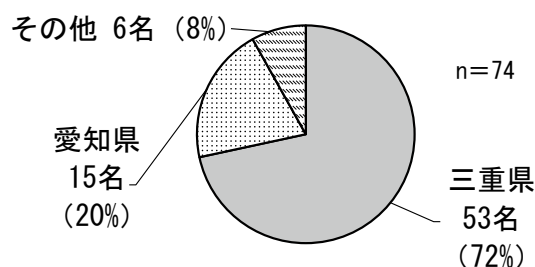


図1. 回答者の基本属性

た。卒業旅行後、4月からの就業（学）に向けて留意したことの有無については、留意した者が47名（78%）で、留意した内容は、【感染予防（マスク、手洗い、手指消毒等）】が16名、【2週間の自宅待機】が9名、【外出を控えた】および【体調管理】がそれぞれ8名であった。

卒業旅行に行かなかった理由では、【計画していたが自ら中止にした】が13名（93%）、【計画していたがツアーが中止になった】が1名（7%）で、予定していた場所は国内が10名、国外が9名であった。

2) 卒業式（図3）

卒業式が中止になったことに対しては、『仕方がない』を選択した者が63名（86%）、『当然だ』が2名（3%）、『何とかしようがあった』が6名（8%）、『残念だ』が1名（2%）、その他として「大学院の入学式はできたのに、卒業式がなかったことに違和感があった」との回答があった。

卒業式の中止を『仕方がない』や『当然だ』と思う理由は、【新型コロナウイルス感染症が拡大しているため】が19名、【新型コロナウイルス感染症拡大防止のため】が15名、【これから医療職として働くため】

が11名、【他もそうだから】が3名、【看護大学での感染は責任問題】が2名であった。その他には、「感染拡大の恐れがあり不安がある中、卒業式を挙げて心から喜べないとも思えた」との回答があった。

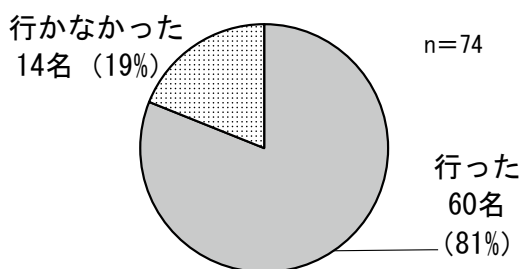
卒業式の実施について、『何とかしようがあった』と思う理由では、【規模の縮小】が5名、【参加者の限定】が4名、【場所の変更】が2名、【感染予防の徹底】が2名であった。また、「講堂で集まって話を聞いたり証書授与をしなくても、みんなで集まって写真が撮りたかった」との回答があった。

3. 勤務（就学）先の状況について（図4）

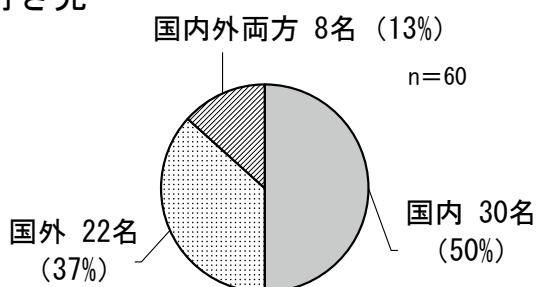
1) 勤務（就学）の開始時期とサポート

4月から勤務（就学）を始めることができたと回答した者は70名（95%）、4月中旬から開始した者は3名（4%）、開始時期不明が1名（1%）であった。待機中に職場からサポートがあったかについては、4月から勤務を開始できたと回答した者も含めて、サポートありと回答した者が12名（43%）、なしと回答した者が16名（57%）であった。サポートの内容は、【視聴覚教材の提供】、【在宅勤務・研修】などであった。サポートがなかった者で、あればよいと思うサポート

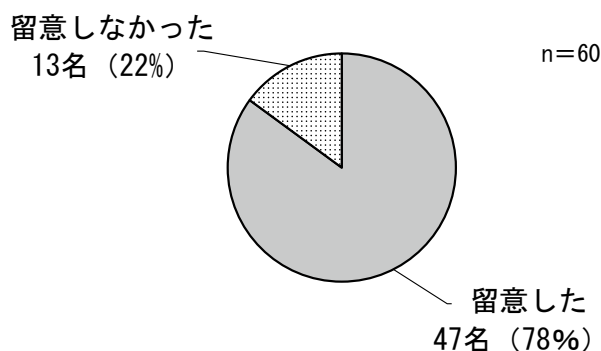
卒業旅行の有無



行き先



旅行後、就業（就学）まで何か留意したか

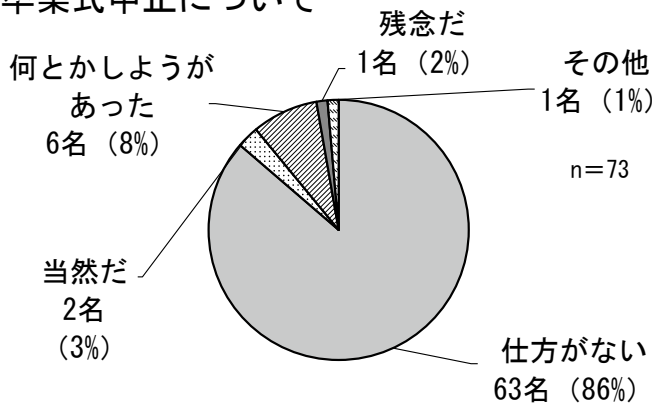


留意した内容

【感染予防（マスク、手洗い、手指消毒等）】：16名
 【2週間の自宅待機】：9名
 【外出を控えた】：8名
 【体調管理】：8名
 【国内旅行への変更】：6名
 その他（情報収集、2月中の旅行であった）

図2. 卒業旅行について

卒業式中止について



仕方がない・当然だと思う理由

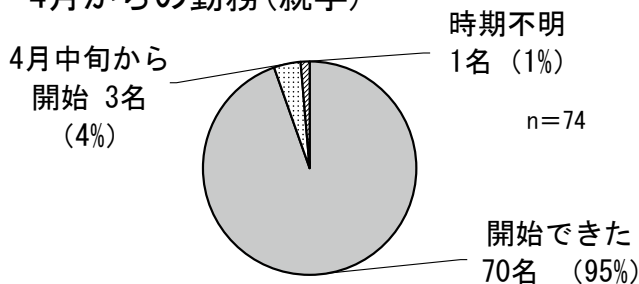
- 【新型コロナウイルス感染症が拡大しているため】：19名
- 【新型コロナウイルス感染症拡大防止のため】：15名
- 【これから医療職として働くため】：11名
- 【他もそうだから】：3名
- 【看護大学での感染は責任問題】：2名
- その他：感染拡大の恐れがあり不安がある中、卒業式を挙げて心から喜べないとも思えた

何とかしよかったと思う理由

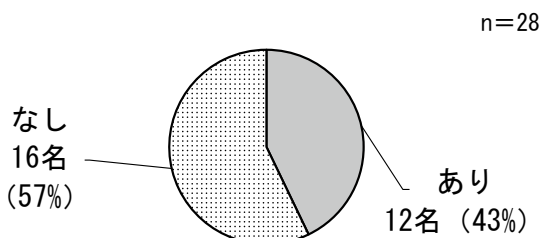
- 【規模の縮小】：5名
- 【参加者の限定】：4名
- 【感染予防の徹底】：2名
- 【場所の変更】：2名
- その他：みんなで写真撮影したかった

図3. 卒業式について

4月からの勤務(就学)



待機中の職場(学校)からのサポート



- #### 待機中に受けたサポート
- 【視聴覚教材の提供】：4名
 - 【在宅勤務・研修】：3名
 - 【課題】：2名
 - 【給料の支給】：2名
 - その他：こまめな連絡

- #### あればよいと思うサポート
- 職場からの連絡：1名

図4. 勤務(就学)の開始時期とサポートについて

は、「職場からの連絡」であった。

2) 職場（学校）の教育・勤務の状況（図5）

新型コロナウイルス感染症拡大で職場（学校）の教育に関する変化があった者は64名（86%）であった。変更の内容は、【研修の中止】が26名、【研修の縮小】が14名、【オンライン研修への変更】が7名、【感染予防をしながらの研修】が7名、【感染予防研修への変更】、【配置の変更】、および【研修の延期】がそれぞれ2名であった。

新型コロナウイルスの感染拡大で勤務に関する変化があった者は30名（42%）で、その内容は、【勤務スケジュールの変更】が5名、【スタッフの異動】が4名、【感染防止の徹底】が4名、【新たな業務の開始】が3名、【病棟再編成】と【休暇の増加】がそれぞれ2名、その他「時間外業務の増加」、「他部署応援による病棟人員不足」であった。

3) 感染防御に関するサポート（図6）

新型コロナウイルスの感染防御について、職場（学校）からサポートを受けた者は42名（58%）で、そ

の内容は、【マスク配布】が20名、【消毒液の配布】が4名、【密を避ける工夫】と【健康観察記録】がそれぞれ3名、【出入り口の制限】が2名、その他「コロナ特別休暇の設置」などであった。

サポートを受けなかった者で、あればよいと思ったサポートの内容は、【マスク・消毒液の配布】7名、その他「休みやすい環境」や「新人への理解」などであった。

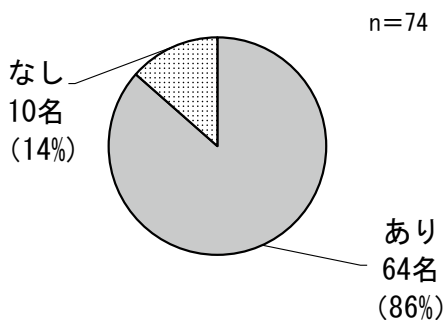
4. 生活上の支障や悩みについて

1) 現在の生活の支障と仕事（学業）の悩み（図7）

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、生活に支障があった者は45名（61%）で、その内容は、【外出制限・外出自粛】が21名、【ストレス発散ができない】が12名、【県外移動の制限】が6名であった。

仕事（学業）に悩みがある者は36名（49%）で、その内容は、【業務量が多い】が8名、【人間関係】と【わからないことへの不安】がそれぞれ7名、【仕事を覚えられない】が3名、【辞めたい、行きたくない】が2名であった。

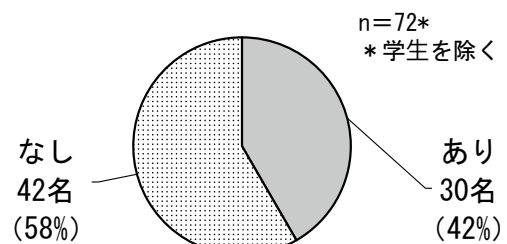
教育に関する変化



教育に関する変更内容

- 【研修の中止】：26名
- 【研修の縮小】：14名
- 【オンライン研修への変更】：7名
- 【感染予防をしながらの研修】：7名
- 【感染予防研修への変更】：2名
- 【配置の変更】：2名
- 【研修の延期】：2名

勤務に関する変化

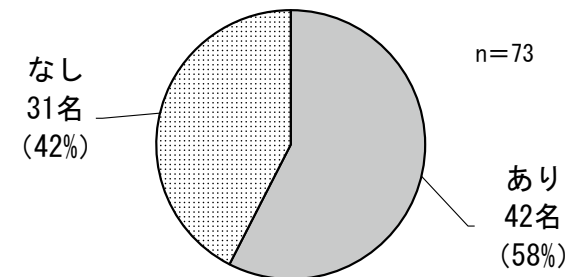


勤務に関する変更内容

- 【勤務スケジュールの変更】：5名
- 【スタッフの移動】：4名
- 【感染防止の徹底】：4名
- 【新たな業務の開始】：3名
- 【病棟再編成】：2名
- 【休暇の増加】：2名
- その他：時間外業務の増加
他部署応援による病棟人員不足

図5. 職場（学校）の教育・勤務の状況について

感染防御に関するサポート



感染防御に関するサポート

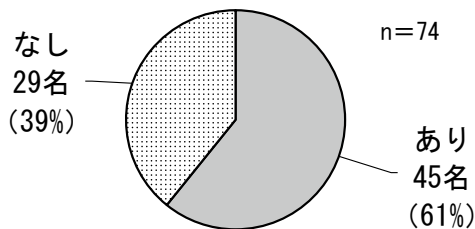
- 【マスク配布】：20名
- 【消毒液の配布】：4名
- 【密を避ける工夫】：3名
- 【健康観察記録】：3名
- 【出入り口の制限】：2名
- その他：マスクが購入できた
コロナ特別休暇、病棟分離
自粛期間の設置
フェイスシールドの配布
飛沫防止板設置

あればよかったサポート

- 【マスク・消毒液の配布】：7名
- その他：休みやすい環境、新人への理解
理解不足者への教育

図6. 感染防御に関するサポートについて

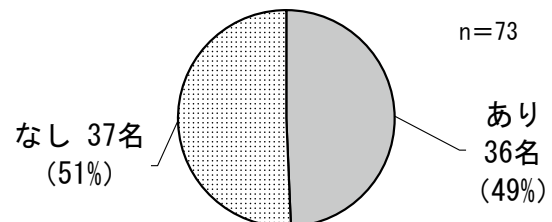
生活の支障



生活上、支障があった内容

- 【外出制限・外出自粛】：21名
- 【ストレス発散ができない】：12名
- 【県外移動の制限】：6名
- その他：人とのかわりが減った
マスク・日用品の不足

仕事（学業）の悩み



仕事（学業）に関する悩み

- 【業務量が多い】：8名
- 【人間関係】：7名
- 【わからないことへの不安】：7名
- 【仕事を覚えられない】：3名
- 【辞めたい、行きたくない】：2名
- その他：相談しづらい、勉強が大変
理想と現実の差

図7. 生活の支障と仕事（学業）の悩みについて

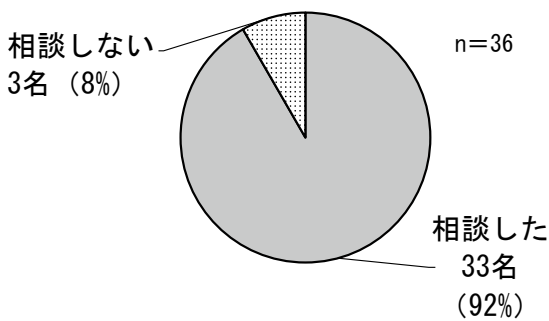
2) 悩みの相談 (図8)

仕事(学業)に関して悩みがある者のうち、悩みを相談した者は33名(92%)で、相談相手は友人が18名、職場の人が8名、家族が7名であった。相談した結果、悩みを解決できた者は13名(39%)で、解決できていない者は20名(61%)であった。

5. 本学からのサポート (図9)

卒業後の4月以降、本学から何らかのサポートを受けたと回答した者は8名(11%)であった。その内容は、【茶話会の開催】が3名、【悩み相談】が3名、【感染症対策に関する情報提供】が2名であった。一方、本学からサポートを受けなかったと回答した者は、64名(89%)であった。本学からのサポートとして、

悩みの相談



相談相手
 【友人】：18名
 【職場の人】：8名
 【家族】：7名

相談した結果

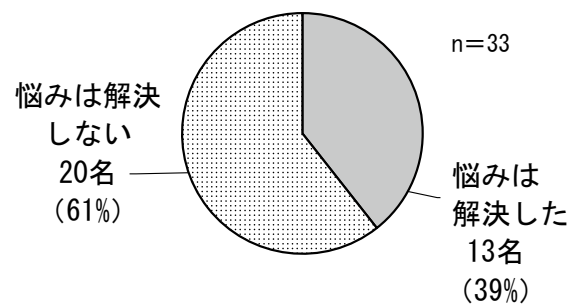
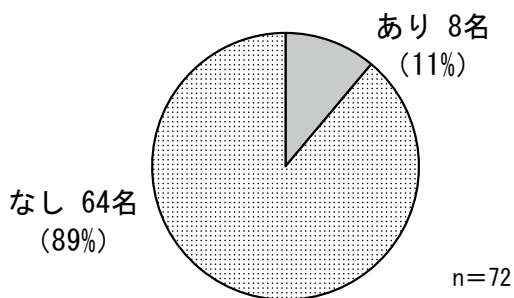


図8. 悩みの相談について

4月以降の本学からのサポート



4月以降に受けた本学からのサポート

【茶話会の開催】：3名
 【悩み相談】：3名
 【感染症対策情報提供】：2名

あればよいと思う本学からのサポート

特になし：19名
 月1回の相談会：1名

図9. 本学からのサポートについて

あればよいと思う内容には「月1回の相談会」があげられたが、【特になし】も19名あった。

6. 新型コロナウイルス感染症拡大下の体験と学び(表1・2)

新型コロナウイルスの感染症拡大下で新生活を始めた卒業生にとって、4月からの生活がどのような体験

であったかについて記載のあった51名の回答を分類すると、【不安・恐怖等の嫌な体験】が15名、【日常の有難さを実感した体験】が12名、【感染症に対する意識が強化した体験】および【医療職者としての自覚を再確認した体験】がそれぞれ9名、【試練となった初めての体験】が5名、【生活を見直す機会となった体験】と【人とのつながりの大切さを再認識した体験】

表1. 自分にとっての新型コロナウイルス感染症拡大の経験

n=51

分類	数	回答例
【不安・恐怖等の嫌な体験】	15	いつ終わるのか分からない不安、パンデミックの恐ろしさを身近に感じることができた
【日常の有難さを実感した体験】	12	気軽に人と会って話して、出かけることのできる世の中が当たり前ではなく、幸せを感じた
【感染症に対する意識が強化した体験】	9	改めて感染について考える機会になった、集団感染が怖く、感染防止対策が大変な体験。
【医療職者としての自覚を再確認した体験】	9	看護師としての意識が問われる体験、プライベートでも医療従事者としての自覚を持つことができた
【試練となった初めての体験】	5	社会人になって一番初めの試練、初めてで不安がいっぱいの体験。
【生活を見直す機会となった体験】	4	日常生活を見直す良い機会、やりたかったことや今までできなかったことにチャレンジする機会にもなった
【人とのつながりの大切さを再認識した体験】	4	人との関わり大切さを知った、人との繋がりが絶たれる寂しさを感じた。
【学びの体験】	4	グローバル化のメリットデメリットを知れた、研修期間が長かったためゆっくり基本を学ぶことができた
【ストレスが増大した体験】	3	新しい環境でのストレスと感染のストレスで大変だった
【その他】	2	人生の大切な時間を無駄にされた、大変な出来事

表2. 医療者として得た学び

n=52

分類	数	回答例
【感染予防の重要性】	28	感染対策の意識が高まった、普段の感染対策をより強化したことで、例年の新人よりも感染対策は意識できている
【医療職者としての責任】	15	医療従事者としての自覚をもつ大切さ、医療従事者が感染を広げてしまう可能性自分の行動が他人を巻き込む責任感
【正しい知識の提供】	4	正しい知識を迅速に発信していく能力やツールが必要であること
【新型コロナウイルス感染症の知識】	2	重症のコロナウイルス患者が入院する病院であったため、感染防止対策やコロナ疑いの患者への対応を学ぶことができた
【感染予防対策を講じた保健事業展開】	2	感染予防対策を講じた健診や保健事業、がん検診の日程調整
【危機管理対策の必要性】	2	不測の事態に備えること、予想して対策すること
【状況変化への迅速な対応】	2	イレギュラーなことに、素早く対応する必要性
【その他】	7	医療の限界、頑張っても報われない、面会できない患者のストレス、経営面の意識の必要性、脅威に対して自分も力になれる、特になし(3)

および【学びの体験】がそれぞれ4名、【ストレスが増大した体験】が3名、その他「人生の大切な時間を無駄にされた」等の回答があった。

今回の経験から医療従事者として得た学びとして記載のあった52名の回答を分類すると、【感染予防の重要性】が28名、【医療職者としての責任】が15名、【正しい知識の提供】が4名、【新型コロナウイルス感染症の知識】・【感染予防対策を講じた保健事業の展開】および【危機管理対策の必要性】・【状況変化への迅速な対応】がそれぞれ2名であった。その他「医療の限界」や「経営面での意識の必要性」などの回答があった一方、【特になし】も3名いた。

IV. 考察

1. 新型コロナウイルスの感染拡大下で本学卒業生がおかれた状況

本アンケート調査の対象となった卒業生は、看護師国家試験を終えた直後に、卒業式の中止が決定された。卒業式の中止は、感染拡大防止、看護職者としての自覚から『仕方がない』と自分を納得させていたと考えられた。令和元年度卒業式予定日には、数名の学生が本学を訪れ、卒業を祝う看板の前で写真を撮る姿が見られたが、これまで共に大学生活を過ごしてきた同級生「みんなで写真を撮りたかった」との思いを持つのも当然の事であった。そのため、感染対策等の工夫で【何とかしようがあった】と振り返る者もいたと考えられた。

卒業生の約8割が看護師として入職を予定したせいか、卒業旅行に行った卒業生のうちの約8割が就業までの間に日常的な感染予防や2週間の自宅待機などの留意をしていた。その甲斐もあり、本学の卒業生は一人も感染することなく、待機日数の長短はあったと思われるが、ほぼ全員が4月から就業できていたことが明らかになった。待機中には、4割余りの卒業生には就業先から自宅研修や課題などのサポートがあり、就業先の新型コロナウイルス感染症対策の一端を垣間見ることができた。

就業先の教育に関して変化があったと答えた卒業生は8割以上で、勤務に関する変化があったと答えた卒業生が約4割であった。教育の変化には研修中止も多く含まれていたが、就業先が新型コロナウイルス感染症拡大という過酷な状況の中でも、研修の規模や方法

を変更するなど工夫して、新人教育に注力されていた様子が伺い知れた。また、日々変化する新型コロナウイルス感染症への対応に伴い、病棟の再編成や人事配置の変更、業務整理なども同時に行われており、卒業生にとっては、より変動の大きい時期の入職であったことが推察された。慣れない実践に対して柔軟に前向きなとらえ方に切り替えることは、年齢の若いものほど難しい¹⁾とされることから、卒業生の職場適応については、今後も見守っていく必要があると考える。

一方で、感染防御に関するサポートは、卒業生の約6割が受けていたものの、医療関係者でありながら配布されるマスクや手指消毒剤の数も限られており、当時の感染防御物資不足の深刻さが表われていた。

新型コロナウイルス感染症拡大下で、卒業生の6割が生活上の支障を感じていた。その内容の一つ一つは、一般人と同様であるが、医療従事者の一員としてより高い感染防御を求められる立場になったからこそ実感する重さがあったのではないかと推測された。

卒業生の約半数が人間関係などの悩みを抱えており、悩みを持った卒業生のうち9割を超える卒業生が悩みを誰かに相談していたが、解決できたのは約4割であった。新人看護職は、自分の知識や経験不足を感じ、学生のころとは違い質的にも量的にも負担が大きくなり、自己評価の低下やリアリティショックが起りやすいたことが明らかになっている^{2,4)}。今回のアンケート結果より明らかになった卒業生の悩みについては、一般的な新人看護職の悩みに加え、新型コロナウイルス感染症拡大に伴った職場での新人教育体制の変化なども影響していると考えられるため、すぐに解決できるレベルの悩みではなかった可能性もあると考えられた。

日常生活について、アンケート調査時点（令和2年7月）では、多くの医療機関で所属職員の外出の制限・自粛が課せられており、その後もその制限・自粛が継続されている施設もあった。これらは、医療従事者として、感染しない・感染させないために必要なことである一方で、卒業生は外出したり、友人と会ったりすることもままならず、ストレスが蓄積されていたことが明らかになった。新しく社会人生活をスタートさせるだけでも不安やストレスが増大するが、それに加えて、前述の感染症対策に対するストレスが重なったことで、精神的負担がさらに増大していたことが推測された。

2. 新型コロナウイルスの感染拡大下で本学卒業生が得た経験と学び

新型コロナウイルスの感染症拡大下で新生活を始めた卒業生にとって、4月からの生活は、不安や恐怖が募り、試練ともいえる体験であった一方で、日常の有難さを実感して生活を見直したり、人とのつながりを再認識したり、感染症に対する意識を強化して医療職者としての自覚を再確認した体験にもなっていた。また、日常生活を制限され、ストレスフルな経験からも、何らかの学びを得ていると実感している卒業生もいた。このように卒業生は、これらの経験をネガティブにとらえる一方で、それらをポジティブに変換するたくましさも備えていたと推測された。

また、新型コロナウイルスの感染拡大下で医療従事者として得た学びとして、卒業生は、医療職者として責任をもって患者や周囲の人々に関わることの重要性を認識していることが明らかになった。加えて、変化が大きく想定できない状況においては、その変化に迅速に対応することや普段からの危機管理の必要性など、看護管理的な視点でも学びを得ていたことが伺えた。

3. 本学における卒業生への支援

本学では平成23年度より、卒業生への支援事業として、新卒者を対象に、毎年6月と3月に茶話会を実施してきた。今年度も例年通り6月初旬に茶話会を企画していたが、準備段階で全国に緊急事態宣言が発令されたことから、実施を見送ることとなった。また、本アンケート結果より、卒業後の大学からのサポートがほとんどなかったと卒業生が感じていることも明らかになった。例年とは異なる状況下の卒業生の心的負担を考慮すると、入職後ストレスが上昇しやすい6月頃⁵⁾の時点で大学からの励ましメール送信やオンライン相談窓口の設置などのサポートが必要であったと考える。

今後も卒業生が抱える悩みを相談できる場所は必須であるため、卒業生からの要望にもあった月一回の相談会の開催など、その方法論も含めて検討する必要がある。

V. おわりに

学生生活最後の節目となる行事を挙げてできなかったことは、学生のみならず、教職員も非常に残念であっ

たが、新型コロナウイルス感染症予防のためには、やむを得なかったものであったと考える。今年度の卒業式の挙行について明確ではないものの、昨年度の卒業生の思いを参考にしながら、徹底した感染予防対策を実施したうえでの卒業式挙行が望ましく、その際には、教職員が一丸となって取り組みたい。

また、就業先の各施設には、新型コロナウイルス感染拡大の対応に追われながらも、新卒者への教育や支援を実施していただいたことに対して、この場を借りてお礼を申し上げたい。

なお、今年度の茶話会については、緊急事態宣言が解除された後の7月11日（土）に感染予防対策を徹底し、メールや録画メッセージを活用するなどして時間を短縮して開催することができた。茶話会自体は短時間であったものの、卒業生が教職員との再会を喜び、また翌日から頑張ろうと思えたならば幸いである。また、現在、今年度3月の茶話会の開催に向けた準備をしているが、全国の新型コロナウイルス感染拡大の推移を踏まえつつ、実施方法の検討も続けている。この茶話会は、社会生活を1年経験した卒業生の成長を、卒業生と教職員が再会を喜びつつ、共に認めあえる貴重な機会である。直接、顔を合わせる事が叶わないとしても、教職員一同、激動の1年を乗り越えた卒業生の成長に目を細めながら、日本の津々浦々で卒業生が保健医療を支えてくれていることへの感謝を伝えたい。

今も卒業生は、新型コロナウイルスの感染症対策の真ただ中で、職場だけでなくプライベートでも多くの制限の中で生活していると推測する。しかし、そのような中でも、医療従事者の一員として、感染予防の重要性や医療職者としての責任等、様々な学びを得ていること、また、日常の有難さや人とのつながりの大切さなどの生活者としての経験も得ていることなどが、本アンケート結果より明らかになった。新型コロナウイルスの感染拡大により得られたこれらの経験と経験したからこそ学べたことや湧き出した思いを無駄にせず、さらに優しく強さを備えた看護職への成長を祈るばかりである。

大学は、卒業生にとってふるさとであってほしいと常々考えている。社会に出れば、その環境で支援を受けられるであろうが、困ったときはいつでも大学を思い出し、些細なことでもいいので活用してもらいたい。

未曾有の新型コロナウイルス感染症拡大の中、保健医療を支える看護職員の一員として、本学卒業生が活躍していることを頼もしく思うとともに、大学の多様な活用法については、具体的な場の提供によって一人ひとりの成長を継続的に応援し続けていきたい。

【文 献】

- 1) 坂井利衣, 高松邦彦, 田中康夫: 病院に就職した新人看護職者の職場適応プロセスに関する研究の動向と課題, 神戸常磐大学紀要, 13, 16-27, 2020.
- 2) 並川聖子: 新卒看護師の入職後直面する困難に関する研究 入職1カ月後と1年後に焦点を当てて, 旭川大学保健福祉部学部紀要, 5, 25-31, 2013.
- 3) 中村和代: 新人看護師の職場適応に向けた精神的支援策の検討—臨床心理士によるグループカウンセリングを通して—, 日本看護研究学会誌, 36 (1), 141-148, 2013.
- 4) 川端泰子, 千田みゆき: 行政で働く新任保健師の困難感に関する文献検討, 埼玉医科大学看護学科紀要, 13 (1), 41-47, 2020.
- 5) 森良信, 三原太, 音成佐代子, 他: 新規採用看護師のメンタルヘルスの経時的変化についての検討, 医療, 65 (4), 204-211, 2011.